様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18500188
研究課題名（和文）　分析書誌学の萌芽と発展に関する実証的研究 － 研究者間学術コミュニケーションを通して
研究課題名（英文）　A Practical Study of the Birth and Development of Analytical Bibliography － through the Scholarly Communication among Bibliographers.

研究代表者
若松　昭子（WAKAMATSU AKIKO）
聖学院大学・政治経済学部・教授
研究者番号：80331354

研究成果の概要：
正確な書誌作成を目的として始まった分析書誌学は、書物の出所を同定したばかりではなく、15 世紀後半における活版印刷史をも描出した。本研究では、分析書誌学の萌芽と発展の様子を、書誌学者たちの残した文献や交流記録、ならびに図書館における彼らの実践を検証することによって明らかにした。その結果、書物に関心を持つ様々な職種や立場の人々の学術的交流を背景に、書物の科学的な研究方法が確立され、その成果は図書館資源の体系化にも活かされていったことがわかった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,000,000	510,000	3,510,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：情報図書館学・人文社会情報学Ａ
キーワード：情報図書館学、分析書誌学、印刷史、印刷術、インキュナブラ

１．研究開始当初の背景

本研究は、研究者間の学術コミュニケーションを理論と実践の両面から検討しつつ、分析書誌学の成立発展の一経緯を明らかにするものである。分析書誌学とはどのようにして始まり、どのように発展を遂げたのであろうか。即ち、19 世紀から 20 世紀初頭において、分析書誌学に関する知的交流や知識伝達はどのようになされたのであろうか。分析書誌学の学問全体を視野に入れ、そのすべての系譜を明らかにすることは困難であるが、同時代の研究成果の中に見られる研究者間の学術的な影響関係を検討することによって、分析書誌学分野における知識伝達の一類型を抽出することは可能であると考える。これは、近年、情報社会を読み解く鍵として関心が寄せられる学術コミュニケーションの解

明という点からも、興味深い事柄であろう。

分析書誌学分野における学術コミュニケーションを研究対象としたものには、分析書誌学の成立初期における書誌学者間交流に関する研究がある。ヘリンガ夫妻（W. & L. Hellinga）は、書物研究に関する書簡や記録をもとに、分析書誌学の基礎が築かれる過程を考察した。これらは精緻で詳細な研究として高く評価されているが、文献研究が中心であり、実践面からの考察としては不十分である。また、分析書誌学のアメリカへの導入について研究されたものはほとんどない。

資料をどのように組織化するかという図書館の基本的なシステムには、その背景となった彼らの理念や研究、また相互の交流や影響関係が具体的な形で示されていると考えることができる。すなわち、彼らによって体系化されたコレクションの内容ならびにその索引や検索の方法等を検討することで、より実証的な形で彼らの思想や理念の交流、および影響関係を裏付けることが可能になる。このような実証的アプローチは、研究者間コミュニケーションについての従来の研究にはほとんど見られない。

そこで、私は書誌学者たちの学術的交流について彼らの残した文献や記録だけではなく、実践の成果、すなわち彼らの理念の具体化として構築された図書館システムを検討することによって、分析書誌学の萌芽と発展のプロセスを解明したいと考えた。

２．研究の目的

本研究では、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて活躍した書誌学者たちの学術的なコミュニケーションの実態を考察することを通して、分析書誌学の成立と発展の様子を実証的に解き明かす。具体的には、書物研究の科学的な方法を確立したヘンリー・ブラッドショー（Henry Bradshaw, 1831-86）の意思を受け継ぎ、インクナブラ（15 世紀刊本・インキュナブラ）の史的配列法であるプロクター分類法を考案した大英博物館のロバート・プロクター（Robert G. C. Proctor, 1868-1903）、当該分類法を図書館の資料編成に応用したロバート・ペディー（Robert A. Peddie, 1870-1951）、プロクター分類体系に則って新たなインクナブラ・コレクションを構築したピアス・バトラー（Pierce Butler, 1884-1953）に焦点を当て、彼らの理論と実践の両面から考察を行うことにより、分析書誌学が彼らの学術的な交流関係を通してイギリスからアメリカへ導入されるに至る、一つの学術的な流れを明らかにする。

３．研究の方法

通常、研究者間の交流関係や影響関係を解明する上では、学問的な著作、交流記録、書簡などの文献が研究の対象とされる。本研究では、文献のみを対象として研究するという従来の方法ではなく、彼らの実践的側面、すなわち研究理念や研究成果を反映していると思われる各図書館のコレクション編成体系をも検証し、より実証的な方法で学術上の影響関係を解明するものである。

平成 18 年度は、大英図書館（The British Library; 前大英博物館図書館部）を訪問し、プロクターに関する資料の収集と、インクナブラを体系化する方法の一つであるプロクター分類法の実際を調査した。インクナブラには、さまざまな活字が用いられており、それによって印刷者や印刷年代を同定し、15 世紀における印刷術の伝播プロセスを辿ることができる。しかし、大英図書館の約一万点のインクナブラをすべて閲覧することは不可能である。そこで、プロクター分類法を参照しつつ、印刷術伝播のプロセスが明確に示されているインクナブラを抽出し、入念な観察と代表的な頁の画像データを収集した。

平成 19 年度は、文献解読作業とともに、大英図書館にて 18 年度調査の補足、印刷史専門図書館であるロンドン・セントブライド図書館（The St Bride Library）にてプロクター分類法の応用の実際を調査した。

平成 20 年度は、文献に基づき考察を進めると共に、シカゴ・ニューベリー図書館（The Newberry Library）とニューヨーク・グロリアクラブ図書館（The Grolier Club Library）にて調査を行った。ニューベリー図書館では、バトラーが収集したインクナブラ、収集時に参考とされた販売目録、収集方針等をめぐって交わされた書簡等を検証し、これまでの考察結果を裏付けた。グロリアクラブでは、ペディーに影響を与えた当クラブ図書館分類法に関する文献を収集すると共に分類体系の現状を調査した。

４．研究成果

(1) 分析書誌学の成立

分析書誌学は、19 世紀後半のヨーロッパにおいて、正確な書誌を作成するために、書物の物理的な側面、すなわち紙、活字、インク、装丁などを研究することによって、書物の印

刷関連事項を同定するところから始まった。その結果、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、多くのインクナブラの印刷関連事項が明らかにされ、それに伴って 15 世紀後半ヨーロッパにおける印刷の歴史が輪郭を現した。

これらの業績は一人ひとりの研究者によって個別に積み上げられたものではない。すなわち、分析書誌学という新しい学問の誕生と発展の背景には、研究者、出版印刷業者、古書業者、図書館員といった異なる職域の人々の知識・情報の交換と共有を通した研究成果の積み重ねがあった[1)]。

例えば、ロンドンの印刷業者ブレイズ（William Blades, 1824-90）は、インクナブラに用いられた様々な活字体の変化に着目し、それらを手がかりとして印刷者や印刷年代等を同定した。また、オランダのハーグ王立図書館長ホルトロップ（Johannes W. Holtlop, 1806-1870）は、インクナブラ目録の編年順配列を試みた。彼らに積極的な助言を行い、書物の物理面での研究を体系化しようとしたのはケンブリッジ大学図書館のブラッドショーであった。彼は、現存するインクナブラのすべてを科学的な方法で調査し、その印刷地、印刷者、印刷年代を明らかにし、それによってこれまで不明であった印刷術の伝播と普及のプロセスを解明しようとしたのである[2)]。

(2) 大英博物館におけるプロクターの実践

大英博物館のプロクターは、ブラッドショーにかわりこの壮大な計画を実現した。彼は、大英博物館とオックスフォード大学ボドレイ図書館に所蔵されていたすべてのインクナブラを対象に、それぞれの活字形態を丹念に調査分析し、それらの印刷者、印刷地、印刷年代を判別した。この結果をもとに、大英博物館とボドレイ図書館の所蔵するインクナブラは、印刷国、印刷地、印刷者、印刷年月の順に再編成されていった。こうしてヨーロッパにおける印刷術の伝播過程が地理的、歴史的に明らかにされたのである。

プロクターによる研究の成果は、『大英博物館初期印刷本索引：印刷術発明から 1500 年まで』[3)]（以下『プロクター索引』という）として結実した。彼はこの索引を編成するにあたり、インクナブラに用いられている様々な活字体を写し取り、それらをファクシミリ化して刊行している。刊行部数はごく限られていたが、それらは当時同様の研究に従事する書誌学者たちへ配布された。

大英図書館には、他館では見ることができないプロクターの手稿や原稿なども残されている。それらの資料からは、プロクターが書誌学分野の主要メンバーとして当該分野の発展に尽力していた様子をうかがうことができる。プロクターは、オックスフォード大学の学生時代、書誌学者として既に著名であったマンチェスター大学図書館のダフ（E. Gordon Duff, 1863-1924）に手紙を出し助言を受けるようになったこと、後にプロクターはダフと共に活字ファクシミリ学会（The Type Facsimile Society）を設立したこと、そして活字研究のみならず会の運営にも中心的役割を果たしたこと等がわかった。

また、プロクターは、大英博物館図書館員になると同時に英国書誌学会の会員となり、研究成果を学会出版物として刊行したり学会誌の索引作成を担うなど、積極的に会の活動に関与した。英国書誌学会は「ブラッドショーの死後、英国の初期印刷史の研究を支えた最も偉大な人物」とプロクターを称えた[4)]。

(3) セントブライド図書館におけるペディーの実践

ペディーは、プロクターの研究を受け継ぎ、発展させようとした一人である。ロンドンのセントブライド図書館は、1895 年に設立された印刷研究所の附属図書館として開設された。図書館の蔵書の中心は、寄贈されたブレイズの私的コレクションであった。ペディーは、1904 年から 1916 年にかけて、セントブライド図書館の館長を務めた。ペディーが館長在任中の 20 世紀初頭は、大英博物館、オックスフォード大学ボドレイ図書館、ケンブリッジ大学図書館等の、インクナブラを大量に所蔵する図書館の館員と、書物に関心を持ち自らも書誌学的な研究に熱心だった印刷業者や書籍商らとの交流がロンドンを中心に活発化していた時期である。セントブライド図書館も、インクナブラ目録の編纂、展示会・講演会の企画開催、研究大会の会場提供などを積極的に行い、分析書誌学分野の研究者交流の中心的存在の一つであった[5)]。

ペディーは、1913 年、インクナブラ書誌の解題『15 世紀刊本』[6)]を出版した。この中で、プロクター索引は「インクナブラの大規模コレクションを体系的、そして科学的な方法で編成した最初のもの」と解説されている。

ペディーは、プロクター分類法の理念をセントブライド図書館における自らの実践にも採りいれた。例えば、1904 年に出版したセントブライド図書館のインクナブラ目録である。これは、ペディーがセントブライド図

書館の蔵書から100点のインクナブラを選び、出版したものである。目録にはプロクター分類法が採用された。約一万点のインクナブラを収録した『プロクター索引』と比較すると、100 点のインクナブラでは印刷術の伝播過程を描くに十分とはいえないが、目録序文[7]では、プロクター分類法に則って自館のインクナブラを印刷史の観点から再編成しようとしたペディーの意図が明確に示された。

また別の例は、1916年に出版されたセントブライド図書館分類法である。この時期、セントブライド図書館は、増加し続ける多種多様な資源を体系化する必要性に直面していた。ペディーは、これらの資料を有効に活用するために、セントブライド図書館分類法を考案した。この分類法は、ニューヨークの書物研究者団体であるグロリアクラブの図書館分類法を基礎として作られた。彼はその理由を、グロリアクラブ図書館分類法はデューイ（Mervil Dewey, 1851-1931）の十進分類法（DDC）を参考に編纂されたので、構成上の展開性があり、増加する新資料に対しても適応能力が高いから、と述べている[8]。

しかし、ペディーは、セントブライド図書館の資料分類に、独特の工夫をも盛り込んでいる。それは、インクナブラを含む図書館の全資料を印刷史という観点から組織化するというアイディアである。すなわち、ペディーの考案したセントブライド図書館分類法には、印刷史を表現可能としたプロクター分類法が応用されたのである。

例えば、印刷を主題とする図書は言うまでもなく、パンフレットやシート、活字体の印刷見本、印刷材料や印刷機等の写真、新聞記事の切り抜き等々の多種多様な資料は、まず主題別に分けられ、十進式の数字による分類記号が付与される。次にその中を印刷開始の早い国順や都市順に分類配列されるといった仕組みである。ここには、十進式分類法の合理性と、プロクター分類法の印刷史的観点とが適切に融合されたユニークな分類体系の実現を見ることができる。この方針は今日まで引き継がれ、セントブライド図書館では、現在も資料組織体系の基本的な部分にプロクターの印刷史的配列法が組み込まれており、近年編纂された当該図書館の目録にもその影響が顕著にうかがえる。

(4) ニューベリー図書館におけるバトラーの実践

バトラーは，1920 年代から 1930 年代のはじめにかけて，シカゴにあるニューベリー図書館の印刷史コレクション部門（The John M. Wing Foundation）の責任者となり，ウィング・コレクションの基礎作りに尽力した。彼は，印刷史のなかでも特に印刷術開始の時期、すなわち15世紀後半から15世紀末までの50年間に関心を持っていた。ウィング・コレクションに含まれるインクナブラの多くは，バトラーによって収集されたものである[9]。

実際の収集活動にあたって，バトラーが終始指針としたのはプロクター分類法であった。彼は、できるだけ多くの活字体を収集することで、多くの初期印刷者の出版本を集め、結果として印刷術伝播の歴史を具視化できるコレクションを構築した。印刷術の伝播とともに、書物の形態は写本様式から標題紙等の機能を備えた近代的な印刷本へと変容した。バトラーの構築したインクナブラ・コレクションは、活字体の変遷を示すばかりではなく、こうした書物変化の歴史を具体的に辿ることができる実例集ともなった[10]。

バトラーがコレクション構築時にプロクターの活字研究成果を参照したのは、ペディーから影響を受けたからであった。バトラーは、インクナブラの収集に先立ち、代表的書誌をもとにインクナブラを調査している。当時は、イギリスにおける分析書誌学の発展期であり、1915年には、ペディーによるインクナブラ書誌解題『15 世紀刊本』（前章参照）が出版されている。これは、バトラーにとって言わば分析書誌学の教科書となった。

さらに、ペディーとの直接の交流によってバトラーはより大きな影響を受けた。ペディーがセントブライド図書館からロンドンの著名な古書店へと勤務先を移した頃、バトラーはインクナブラの購入のために渡欧してペディーと出会っている。バトラーは、後にニューベリー図書館所蔵インクナブラ目録を編纂しているが、その中で、コレクション形成を通して出会った多くの書籍商の中でも、特にペディーからはより多くのことがらを学んだと記し[11]、インクナブラ収集に際してペディーから受けた助言や支援に対して謝意を表明している。

(5) 考　察

草創期の分析書誌学は、インクナブラを研究対象としていた。印刷術の発明と伝播の時期に生まれたインクナブラを対象とする研究は、活字研究という物理的特性を持つと同時に、インクナブラの歴史を明らかにするという歴史的特性をも有していた。19世紀後半、プロクターによって多くのインクナブラの

出版者や出版年が明らかにされ、インクナブラは歴史的に再編成された。即ち、彼は活字体の変遷を辿ることによって、印刷術の歴史地理的な伝播過程を明らかにすることに成功したのである。

ペディーは、プロクター分類法を応用してインクナブラの印刷史的編成を行うばかりでなく、その印刷史的体系を自館の全資料にも適用するなど、分析書誌学を更に発展させた。20 世紀前半、バトラーはコレクションに印刷史を再現するという目標を持って、インクナブラの収集を開始した。そのバトラーのよき指導者となったのはペディーであった。バトラーは、ペディーを通して書誌学の知識を習得すると共に、インクナブラ収集においても多くの助言を受けた。バトラーは、プロクター分類法を指針として、様々な活字体のインクナブラを収集し、コレクションを通して印刷術伝播の歴史を表現した。

プロクター、ペディー、バトラーの 3 人の書誌学者に共通する特性は、プロクター分類法を用いてインクナブラを歴史的観点から体系化しようとした点にある。しかし、バトラーの場合は、プロクターやペディーの場合と全く逆方向からの試みとなっている点が興味深い。つまり、大英博物館に所蔵されていた 8,000 点のインクナブラを歴史的観点から再編成したプロクターや、セントブライド図書館所蔵のインクナブラにプロクター分類法を応用しようとしたペディーの場合は、最初の段階で既に多くのインクナブラが手元にあった。しかし、バトラーはウィング財団の新たなコレクションを形成するという任務のもとに、限られた予算内でインクナブラを集めなければならなかった。有意義で有益なコレクションを構築するために、バトラーはプロクターの分類法を参考とした。即ち、彼はプロクターの分類法に則って歴史的体系の枠組みを先に設定した上で、インクナブラを収集していったのである。その意味では、イギリスにおいてインクナブラを研究対象として生まれた分析書誌学は、その応用の過程でアメリカに移入されたと捉えることができる。

本研究で考察対象とした、イギリスからアメリカに至る分析書誌学の一つの流れは、当該研究分野のアメリカへの導入をすべて解明するものでは無論ない。言い換えれば、プロクター、ペディー、バトラーへと伝達されてゆく学識の流れは、大きな潮流のなかの一例に過ぎない。しかし、彼等の研究活動の底流を支える学識の生産・伝達のありようは、今日関心が集められている情報流通という視点から見ても興味深い。ここで抽出された分析書誌学の発展過程における一つの流れは、学問の系譜や学術コミュニケーションの構造を考える上での一つのヒントを示しているといえるのではないだろうか。

注・引用

1)若松昭子「インクナブラの活字研究と書誌学者間の学術コミュニケーション－ブレイズ、ブラッドショー、プロクターを中心に」『聖学院大学論叢』第 20 巻第 2 号,2008, p.185-196.

2)*Henry Bradshaw's correspondence on incunabula with J.W. Holtrop and M.F.A.G. Campbell*. Ed by Wytze and Lotte Hellinga. Amsterdam, Herzberger, 1966. 2v.

3)Procter, R. *An index to the early printed books in the British Museum; from the invention of printing to the year 1500 with notes of those in the Bodleian Library.* London, Kegan Paul, 1898-99. 2v.

4)Johnson, Barry C. *Lost in the Alps: a portrait of Robert Proctor, the "Great Bibliographer" and of his career in the British Museum*. London, 1985, p.33

5)若松昭子「イギリスにおける分析書誌学の草創と発展－セントブライド印刷図書館を中心として」『図書館情報学の再構築』勉誠出版, 2001, p.168-179.

6)Peddie, R.A. *Fifteenth-century books: a guide to their identification*. New York, Burt Franklin, 1913, p.14

7)Peddie, R.A. *List of early printed books*. London, St. Bride Foundation Institute, 1904, p.[1]

8)Peddie, R.A. *The St Bride Typographical Library: its method and classification*. Aberdeen, The Univ. Press, 1916, p.3

9)若松昭子「ピアス・バトラーによる印刷史コレクションの形成－インクナブラの収集を中心に」『図書館学会年報』Vol.44, No.1, 1998, p.1-16.

10)若松昭子「インクナブラ・コレクションに見るバトラーの書物観」『日本図書館情報学会誌』vol.46, No.4, 2001, p.143-158

11)Butler, P. *Check list of fifteenth century books in the Newberry Library and in other libraries of Chicago*. Chicago, The Newberry Library, 1933, p.xv-xvi

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①若松昭子「分析書誌学の資料組織化への応用－セントブライド図書館におけるペディーの実践を中心に」
『聖学院大学論叢』（査読無）第 21 巻第 1 号，p.47-60.(2009.3)
http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/

②若松昭子「出版特認制度と海賊版－著作権法成立前史」
『図書館情報学研究［聖学院大学］』（査読無）第４号，p.54-65.（2008.4）
http://www.seigakuin.jp/course/library/images/2.pdf

③若松昭子「インクナブラの活字研究と書誌学者間の学術コミュニケーション－ブレイズ、ブラッドショー、プロクターを中心に」
『聖学院大学論叢』（査読無）第 20 巻第 2 号，p.185-196.（2008.3）
http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/

〔学会発表〕（計１件）
①若松昭子「情報メディアの歴史と変遷－印刷革命を中心に」
情報メディア学会第７回研究大会特別講演（招待）．2008 年 6 月 28 日，東京大学

〔図書〕（計１件）
①『図書館人物伝：図書館を育てた 20 人の功績と生涯』（共）（査読有）
日本図書館文化史研究会編．執筆：小川徹他 19 名,日外アソシエーツ,475p.　2007.
執筆箇所：外国人篇「ピアス・バトラーの図書館学における理論と実践－書物観を中心に」若松昭子（掲載順 16 番目）p.347-366.

〔その他〕
①科研費成果の社会還元・普及事業「ひらめき・ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」
実施担当代表者：若松昭子

1.「本を解剖する－メディアとしての書物の世界」平成 19 年度採択プログラム
http://www.seigakuin.jp/course/library/hirameki/2007/index.html
http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht3000/ht3032_seigakuindai.html
http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht3000_jisshi/ht3032_seigaku_jisshi_.html

2.「本を解剖する vol.2－情報が生まれる場所・情報を生かす場所」平成 20 年度採択プログラム
http://www.seigakuin.jp/course/library/hirameki/index.html
http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht20000/ht20043.html
http://www.jsps.go.jp/hirameki/ht20000_jisshi/ht20043.pdf

②新聞報道情報
ひらめき・ときめきサイエンス「本を解剖する－メディアとしての書物の世界」平成 19 年度採択プログラム（実施担当代表者：若松昭子）に関する記事

1.「大学の研究室を身近に」『大學新聞』2007 年 12 月 25 日．3 面

2.「書物の歴史を探る」『埼玉新聞』2007 年 12 月 3 日．12 面

③『図書館情報学用語辞典』第３版（共）日本図書館情報学会編．執筆:戸田慎一他 165 名，丸善，300p．2007．執筆項目：グーテンベルク、コーデックス、ピアス・バトラー他計５項目　若松昭子

④ホームページ
http://www.seigakuin.jp/course/library/kyouin_02.html

６．研究組織

(1)研究代表者
若松　昭子（WAKAMATSU AKIKO）
聖学院大学・政治経済学部・教授
研究者番号：80331354

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし